

# 徒然草

by 3年 機械工学科

ヤン目〜民 四死馬太原稿

ツマラナイカラゴナ!

ハ  
V  
ヨ

## 第1部 アホも歩けば猫にあたる。

—僕が猫語をはなせるわけ—

僕は猫を飼っている。まあなく21歳になるうとする体長1m59cmで栄養のゆきとどいて肥えた黒いりっぱな毛並の牝猫だ。名を“ちひろ”と言う。この名は僕が飼い始める前からついていて、親猫がつけたものらしい。僕にも、タマとがジョセフィーヌだとか好みのお名前もあるのだが、がまんして“ちひろ”と呼んでいる。僕がこの猫を飼い始めてから3年と3か月になるのだが、飼うようになっていきさつから話してみよう。

僕がその猫を初めて知ったのは、今から4年前の1974年の4月、僕が高校2年になった時だった。新しいクラスになるとその猫がいたのである。それから1年間はその猫にはあまり関心をもたなかった。そして春休み、クラスで河口湖に1泊旅行に行った。夜男女ペアになって宿の近くの寺をまわってくる“きもだめし”が行われた。その相手を決めるくじ引きで僕はその猫にあたった。2人で暗い道を懐中電灯で照らして歩いて行く時、こわがりのその猫は僕の着ている服のそでにつかまってきた。僕は墓を歩いても少しもこわいとは思わないので余裕をもて歩いていたが、そでをつかまれるのは何ともしばり

くてしがたがなかったので、猫の手を振りほどき、その手をにぎった。後で、その猫はその時のことを、「ゴロニャオーン」（訳：びっくりした）と語った。僕はそのころ、その猫を好きで飼い主になるうなどとは全く思っていなくて、多少の好意を持っていた程度だったと思う。あまりよくそのころの自分の気持を覚えていない。さて、そうして僕と猫は、寺の墓場へ入って行った。きもだめしなどと、あとから来る奴をおどかしてやろうという者が必ずいるもので、僕と猫もおどかされた。僕はまた僕で、懐中電燈を消したり、いろいろなことを言っておどかしたので、猫はハンカチを口に含んで泣きそうなお顔になっていた。そんなきもだめしが終わると、僕たちをおどかした者の口から「猫と“四死駟君”が手をつないでいた。」という話がクラスに流れた。みんなが「おい、“四死駟”はどうやって猫と手をつないだんだ。」「四つんばいになったのが。」「いや、猫が“四死駟”の手にぶらさがったんだらう。」「まさか、“四死駟”があんな太った重い猫をささえられるわけないだろ。」「そうだなあ。」というような会話がなされたがどうかは定かでない。しかしそれ以後、僕と猫は互いを意識するようになり、まわりもあの二人（一人と一匹）というふうに見られるようになったようだ。

2年から3年に在る時はクラスがえがなく同じクラスのまま進級した。3年の1学期は僕と猫の間は別に進展もなく過ぎていった。夏休み、クラスでまた秩父へ1泊旅行に行った。そしてこの時のきもだめしで、僕はまたその猫とくじであたってしまった。誰かの策略かと最

初思、だが、やはり偶然くじであた、たものらしい。この時は、こわ  
かりのその猫を泣かせてしまった。こんなことがありながらも、僕と  
猫は少しずつ近づいていったのだと思う。そして僕が猫を飼うようにな  
った直接のきっかけは、秋の文化祭の最終日のことだった。僕のいた  
高校では3年生もりキがあり、各クラス文化祭ではがんばっていた。  
僕のクラスでは安部公房の「<sup>ちんぽう</sup>闖入者」(戯曲名-友達-)という劇を  
上演した。最終日の上演を終えると、僕たちのクラスは後夜祭のフォ  
ークダンスには出ないで、吉祥寺へ行きコンパをした。そしてその帰  
りにその猫を親猫のいる所(青梅)まで送って行った。その時の僕は、  
「きょうは、どうしても猫を送っていかなくてはいけ無い」そんな気  
持ちになっていたようだ。青梅からの帰り、立川から東京行きの終電  
に乗った僕は、すでに家へ帰る電車もなく、武蔵境の駅で降り家まで  
1時間余り歩いて帰った。貧しい高校生ゆえ、タクシーに乗るうとは  
まったく考えなかった。家についたのは午前1時30分ごろだった。家  
に向か、て歩く1時間、なにがとて満ち足りた気分だったことを覚  
えている。それ以来、僕と猫は学校の帰りにいっしょに帰るようにな  
り、どちらからも「飼ってほしい」とか「飼ってやる」とかいうこと  
なしに現在に至っている。

現在の僕と猫であるが、飼っているといってもいっしょに住んでい  
るわけではない。「ちんぽう」は親猫と青梅に住んでいて、なんといっ  
ちようまえに目白にある大学に通っている。飼い主である僕は「ちん  
ぽう」と月に2度ぐらい会うだけである。「それで飼い主っていえるか」

って？ でも「ちむろ」は僕を飼い主と認めているようだ。もっとも、僕の知らないところでみんなに愛嬌をふりまいて、もっとえさをたくさんくれてかわいがってくれる条件のいい飼主を得ようとしているのかもしれないが。しかし会う時にはそんなことはおくびにも出さず、いそいそとやってくる。「ちむろ」は高校時代から、男からも女からも「ちむろ」とか「ちむろさん」とか呼ばれていて苗字（猫のくせに苗字がある）で呼ばれることはほとんどなかった。ところがこの「ちむろ」と言うのがむずかしい。平らな調子で「ちむろ」とどこにもアクセントをおかずに言うと、「ミャーオ」と「ち」にアクセントをおいて「ちむろ」だと言う。少しぐらい英語を勉強していると思って英語なみに最初にアクセントをおきたがる。また「ちむろ」は犬がきらいで、その上猫まできらいという。いったい家では親猫とどんな暮らしをしているのか。またこの「ちむろ」は中学-高校とテニスをやっていたのをやめたせいだ、太った猫になった。しかし本人（本猫？）は気にするふうもなくよくえさを食べる。僕は太っているのを全く気にしていないけれど、「せめて53kgぐらいになれよ」（現在はたぶん56~57kgぐらい）と言うと、一時はしょぼんとするけれど、すぐにそんなことは忘れたかのように「ニャーオ、ニャーオ」と鳴き出す。僕が気にしていないということを読まれているようだ。

特に、きれいな顔をしているわけでもなく、それほどかわいいというわけでもなく、スタイルがいいともいえないうけれど、いつも笑顔で

っている。そんなところが僕の気に入っている点だろう。この猫を知って5年近く、飼い主になって3年3か月、長生きしそうな猫なので、まだ当分は僕が飼っていることだろう。

あの時、もし、別のくじを引いていたら、もし、そでにつかまられることがなかったなら、僕はこの猫の飼い主でいたのだろうか。それは僕にもわからない。

## 第1部 一完

○なお第2部は1980年春刊行予定

○おわりに

今回は、サイクリングとはまったく関係のないことを書いてみた。まあ、こういうのが部誌の中にあってもいいんじゃないでしょうか。なお、この文章を書くにあたって、多大な御協力を惜しまれなかった吉田兼好、庄司薫の両氏に深く感謝いたします。また、締切を大幅におくれて、サイクリング部書記の方々には大変御迷惑をおかけしました。深くおわびいたします。

1978年 12月 22日

発行所：新鳥社

責任者：丸川冬樹

新鳥文庫

三浦ホントロー：かきかた入門 140円

吉本おとる：僕のそうらつ論 140円

大塚ハカ夫：パチンコ人生 180円

曾我部カキ：力学 230円

安井たかい：物価はどうなる 210円

金井キョウ：あつてんと呼ばれるために 170円

サイクリングの痴性 140円  
あります

の出す痴性  
よしく顔  
ね。がをて  
○る

新鳥の冬  
日本の冬